# 非競合・非定着的戦略理論の再構成
## —脱近代的風景の協働的開示を可能にする戦略図式への組み替え—

藤　本　征　司*

Reconstruction of the Noncompetitive and Non-sedentary Strategy Theory
— The Updating to Strategic Schemata Cooperating the Trance-modern Scenery in Human and Nature

Seishi FUJIMOTO*

Summary

For the purpose of clarification of the strategic schema common in human and nature cooperatively actualizing the trance-modern scenery, reconstruction of the noncompetitive and non-sedentary strategy theory (the NNS theory), previously proposed by Fujimoto (1993), was carried out. Consequently, a new version of the NNS theory was presented as strategic schemata common in human and nature for exceeding modern ages. It is considered that the new theory presented here provably contribute to the actualization of the trance-modern scenery.

## Ⅰ．緒　論—提案してきた理論の概略とその問題点—

### （1）原型となる高木類の生活戦略理論の概略

まず、これまでに筆者が提案してきた、冷温帯以北での高木類の生活戦略を競合・定着的戦略と非競合・非定着的戦略に区分する理論（Fujimoto & Miyakawa, 1991；藤本、1993）、すなわち、本稿で再構成を計ろうとする、「非競合・非定着的戦略理論」の再提示から始める。ここでは、この理論の概略を記すに留める。この理論の詳細や理論が成立するより詳細な論拠やデータなどについては、藤本（1993）を参照願いたい。またここでは文献の引用も殆ど行わなかった。文献についても藤本（1993）を参照されたい。

通常、樹木（高木類）は、その生活形の違いから、針葉樹と広葉樹に区分されたり、落葉樹と常緑樹に区分されたりしているが、提案してきた類型区分では、葉形や葉態の違いよりも、突出型樹形（主に針葉樹に見られる、主幹が明瞭で、樹冠が上部に向かって突出する円錐形の形状を呈する樹形）と沿下型樹形（主に広葉樹に見られる、主幹が不明瞭で、樹冠が下部に沿下する逆

＊静岡大学農学部附属地域フィールド科学教育研究センター　静岡市駿河区大谷 836
Center for Education and Research of Field Sciences, Faculty of Agriculture, Shizuoka University.

円錐形の樹形）の違いの方がより重要と考えられており、このような考え方に従って、樹木を突出型樹種と沿下型樹種に類型区分している。この点に提案してきた理論の最大の特徴のひとつがある。また、この類型区分は、これまでの生活戦略理論との関連で考えると、Grime(1977、1979)の植物全般についての３類型区分を批判的に継承した理論としても位置づけられる。すなわち、Grime は、r・K理論（Pianka,1974）を批判的に継承し、植物の適応戦略を競合戦略（Competitive strategy）、ストレス耐性戦略（Stress tolerant strategy.）及び攪乱耐性戦略（Ruderal Strategy）の３つに区分し、その攪乱耐性戦略をｒ戦略と、ストレス耐性戦略をK戦略と結び付けて理解する考え方を示したが、筆者による類型区分は、Grime の考え方をさらに批判的に継承し、攪乱耐性戦略とストレス耐性戦略を非競合的戦略として一括し、競合的戦略と対比させた理論といえる（Fujimoto & Miyakawa, 1901）。以上のように、この類型区分は、これまでの植物の適応戦略理論を批判的に継承することにより、構成された理論といえ、このこともまた、この類型区分の大きな特徴のひとつといえる。また、非競合的な戦略を非定着的な戦略とみなし、競合的な戦略を定着的な戦略と捉え直していることも、この類型区分の特徴のひとつで、これは、ドゥルーズ（1973）や Deleuze,G.& F.Guattari(1980)による、非定着（遊牧民）的戦略を、結果的に大きな移動を行なう場合もあるが、場合によっては移動しない戦略として捉らえたり、その持つ生活能力を定着化するものとは異なった方向で利用するといった戦略として捉える彼らの「遊牧民論」を参考にして組み立てた理論である。このように、人間の生き方と対応させながら、樹木の戦略を捉えている点も、提案した類型区分の大きな特徴のひとつであるといえる。

以下に触れるとおり、この類型区分に従うことで、説明がより容易となる生態学的事項は少なくない。

まず、提案した類型区分に従うと、冷温帯以北の天然林の構造や推移のパターンの包括的理解が容易となる。すなわち提案した類型区分に従うと、冷温帯以北の森林は究極的には突出型樹種と沿下型樹種が示す遷移（時間的分布）と「すみわけ」的構造(空間的分布、帯状分布)と解釈できるようになる。まず、均質で限られた空間内においては、突出型樹種は競合圧が相対的に低く、それ故、物理的環境圧が相対的に高い時期により多く出現し、逆に沿下型樹種は競合圧が相対的に高く、それ故、物理的環境圧が相対的に低い時期により多く出現する。ここで出現とは上層木化、すなわち上層林冠の交代を意味する。またここで物理的環境圧にはストレス(恒常的環境圧、stress)と攪乱(disturbance) が共に含まれている。競合圧とは、競合に伴う環境圧、つまりそれほど強度とは言えない被陰を意味する。またストレスが高いとは、光、温度、水分、土壌条件などが恒常的または長期的に劣悪である状態を指す。被陰は強度なものでなければ競合圧であるが、これが強度で長期的なものとなると物理的環境圧の一種であるストレスに転化する。そして、このような時間的分布が空間に転化したものが、突出型樹種と沿下型樹種の「すみわけ」的構造と解釈できる。このような「すみわけ」的構造は至るところで見いだされる。例えば、蛇紋岩の多い地域などでは、突出型樹種が優占するが、これは土壌的影響によって突出型樹種から沿下型樹種への遷移が進行しないために生じる「すみわけ」的構造の一例である。そして、その極めてマクロな表現が冷温帯以北に認められる垂直分布であり水平分布とみなせるようになる。

すなわち提案した類型区分は森林帯分布を説明する枠組みとしても有効といえる。冷温帯以北の森林帯を落葉広葉樹林帯と常緑針葉樹林帯に区分する、これまでの考え方には大きな問題がある。何故ならば、常緑針葉樹林帯の中にはカンバ類などの落葉広葉樹も含まれるため、構成要素から見ると、冷温帯以北の森林は必ずしも落葉広葉樹林帯と針葉樹林帯には区分できないからである。それよりも、カンバ類などは突出型樹形を呈する樹種なので、これらと常緑針葉樹を、ともに突出型樹種として一括し、冷温帯以北の森林帯構造を突出型樹種と沿下型樹種の「すみわけ」的構造とみるほうがより明快な理解の仕方となると考えられる。

また、提案した類型区分に従い、マクロな「すみわけ」的構造を歴史的な森林帯の成立過程として捉え直すと、現在の亜寒帯林(亜寒帯生高木類)は、本来に非競合的・非定着的習性を示す突出型樹種による、本来的に競合的・定着的な行動を示し易い沿下型樹種からの半ば自律的な歴史的競合回避によって生じたものであるとする理論（亜寒帯林の起源に関する突出型樹形説）が導かれるようになり、亜寒帯林の起源が矛盾なく説明できるようになる。すなわち、現在、針葉樹は主にその分布の中心を亜寒帯域に持っているが、なぜ針葉樹の分布が環境条件が必ずしも良好とはいえない亜寒帯にシフトしているのかに関しては、これまでおよそ二つの仮説が提案されていた。そのひとつは、樹木は様々な厳しい環境障壁を乗り越え進化してきたが、常緑針葉樹はその中でも最もこのような進化を進めてきた分類群であったため、亜寒帯への進出が可能となったとする仮説である。しかし、この説では、それでは彼らは何故、環境条件の劣悪な亜寒帯に対応していかなければならなかったのかという疑問が残る。もう一説は、樹木の多くは進化した被子植物であるが、亜寒帯系樹木の多くは進化段階の低い裸子植物なので、進化した広葉樹類との競争に敗れたため、劣悪な亜寒帯域に逃げのびたのだとする説である。この説は、第一の説を補完する説でもあるが、進化しなかったからだという考えなので、ある意味では第一の説とは正反対の考え方でもある。筆者の「突出型樹形説」は、そんな両説の矛盾を解消する鍵を亜寒帯系針葉樹に典型的に見られる突出型樹形に求め、沿下型樹形を持つ温帯系樹木は、その樹形を活かして、競争を行ない、それを通してもともとその樹種が分布していた空間での適応度を高め、そこに定着していく性質を持っているが、それに対して突出型樹種は、樹形の作りから考えて、もともと競争を避ける性質を持ち、１箇所に住みつかず、遊牧民のように広い範囲を動きまわる性質を持つため、歴史の中で亜寒帯にまで進出するようになったと考える理論である。すなわち、この理論は、突出型樹種が亜寒帯に分布の中心を持つのは、広葉樹との競争に負けたからというよりも、もともと競争しない性質を持ち、遊牧民のように生活の場を固定する傾向が少なかったためであるとみる理論となる。

以上のように筆者が提案した類型区分に従うと、冷温帯以北の高木類の生育・更新特性や森林の構造や遷移パターンなどの包括的理解が可能となるのみならず、亜寒帯林の起源の解釈もより容易となると考えられる。そのため、提案した類型区分は、冷温帯以北の森林の包括的認識枠組みとして有効性の高い理論であると考えられる。

### （２）理論のその後の展開－特に「風景論」への展開

以上のように、筆者の類型区分は、もともとは冷温帯以北の樹木を対象にした区分であったが、その後の研究により（藤本、1998；藤本・若木、1999）、暖温帯以南を含めた森林景観の基本構造を理解するうえでも、有効性の高い考え方であり、また、その意味で、森林を含む風景の総体を記述する理論としても有効性が高いことが示唆された。

まず、提案してきた類型区分に従うと、森林景観（森林風景）は、生態学的には、非競合的で非定着的な生活戦略を示す突出型樹種と、競合的で定着的な生活戦略を示す沿下型樹種との関係の総体として理解できるようになる。森林景観はもちろん、これまでの景観生態学が示してきたような、「互いに異質な諸部分（部分生態系）の複合」（杉村、1993）といった空間概念で理解することもある程度までは可能である。しかし、このような考え方に問題があり、このように捉えたとしても、それは、現前する実空間としての森林景観の複雑な一側面の実体化に過ぎず、必ずしもその基本構造が呈示されたことにはならない。Forman & Godron（1986）による、景観を、母体と回廊とパッチの集合体と見なす考え方は、その総体を動的に捉えようとしている点では優れているが、３者を実在的なものと見なした上で、それらの相互関係を考えようとしており、その意味で、実体化・物象化の難を免れていない。すなわち、森林景観はこのような実在的空間概念では捉えられない複雑で実体化が困難な事象であり、むしろ、上述したような関係概念によって捉えることが景観（風景）の基本構造を理解する第一歩となると考えられる。

筆者が提案した考え方に従って、冷温帯以北の森林景観の基本構造を考えると、基本的には、亜寒帯には主に突出型樹種が分布し、冷温帯に主に沿下型樹種が分布するというすみわけ構造が成立していることになるが、ここで、まず重要なことは、沿下型樹種は、冷温帯を生育の場として、そこに定着しているとしても、突出型樹種は非定着的な樹木であるため、亜寒帯に定着しているわけではなく、さらに広い範囲を分布域とし、機会的に冷温帯域にもしばしば出現することである（藤本、1993）。

そしてこのような考え方は暖温帯系の高木類にも当てはまり、暖温帯域も、その主要構成メンバーが落葉樹から常緑樹に置き換わっているものの、基本的には冷温帯と同様に沿下型樹種が定着する空間とみなせる。しかし、その一方で、暖温帯域にも、より広い範囲を分布域として持つ突出型樹種が機会的に進出・後退を繰り返してしていることになる。冷温帯域と暖温帯域の間に中間温帯域を設定して、ここを温帯系針葉樹の固有の分布域と見る考え方もあるが、一方で、これらの樹種はもっと広い範囲に分布する分類群であり、暖温帯域にも多く認められるとする考え方も一般的である（四手井、1976）。提案してきた考え方に従うと、どちらかというと後者の考え方の方が妥当だということになる。中間温帯域も、そこが温帯系針葉樹の主要な分布域となっているとしても、彼らが適応度を高めることによって獲得した定着域とはいえない。冷温帯と暖温帯の移行帯である中間温帯域では、冷温帯系の沿下型樹種（すなわち落葉樹広葉樹一般）と暖温帯系の沿下型樹種（すなわち常緑広葉樹一般）の双方からの競合圧から開放される機会が多いと考えられる。すなわち、筆者の戦略理論に従うと、中間温帯域は、このような両者からの競合

圧が少ないために、しばしば突出型樹種（針葉樹）によって占められる機会が多い空間と解釈されることになる。暖温帯域の土壌や水分条件の劣悪な尾根筋などに、マツ類やモミなどの針葉樹が優占している事例がしばしば認められる。このような現象についても同様の解釈ができるようになる。

以上のように、筆者の類型区分に従うと、暖温帯域の森林景観も、そこに適応し、その場に定着している暖温帯系の突出型樹種と、そこを住み場所としておらず、その意味で、極端にいうとその場に無縁な要素と見なすこともできる突出型樹種の双方によっておりなされる関係の総体として理解できるようになる。そして、以上のように、その場の構成要素とは見なせないような非定着的なものの関与も考慮に入れることで、実際の複雑で実体化が困難な森林景観の構造や推移パターンの総体の理解がより容易となると考えられる

また、提案してきた考え方を樹木に限らず生物一般、さらには人間にも当てはめて考えていくことで、以下の通り、ひとつの新たな森林景観（森林風景）論の抽出も可能となる。

まず、以上の考え方は、それをより一般的なメッセージとして読み替えると、「樹木の世界にも、農耕民のように定住的な生活をするものだけではなく、遊牧民や漂泊民のように、生活の場を限定せず、いつもどこかに流離していくような生活形態をとるものが少なからず存在し、しかも、このような生活様式は決して消え去った過去のものなのではなく、けっこうしぶとい戦略であり、北方に大面積に広がるタイガの森も、実はこのような遊牧民的な戦略の産物なのだ」といった考え方に読み替えられる。そしてこのように読み替えると、それは、最早、生物生態学内部のみに留るメッセージとはいえなくなり、それは、即、網野（1990）によって示された遍歴民（漂泊民）論などとも引きあってくる。さらには、ドゥルーズ(1973)やDeleuze.& Guattari(1980)、リオタール（1973）などの西欧現代思想の１潮流からのメッセージとも連動していくようになると考えられる。

すなわち、以上のような樹木に関する考え方を樹木以外の生物や人間などにも当てはめて考えていくことで、ひとつの風景論が展開可能となってくる。風景論（景観論）として読みかえると、筆者の類型区分は、森林空間や自然空間を競合的で定着的なものと非競合的で非定着的なものがおりなす世界であるとする考え方に至りつく。そしてそのことは、森林や自然を、その場に住んでいるわけではないもの、その場にとって究極的には無縁なものも多数出入りする、賑やかで実体化困難な多交通的世界と考える必要があることを意味している。そしてさらに考えを進めれば、以下に触れるとおり、森林や自然は、最早ひとつの空間というよりも、実体化困難なひとつのリゾーム（Deleuze & Guattari、1976）であり、さらには様々な実体化される諸物に先立ってある、様々なものが出会いあう、そんな出会いの連続（様々な出来事の総体）のようなものとして捉らえられるようになる。

以上のことについてもう少し詳しく記しておく。

これまでの森林風景（森林景観）は、たぶん以下のふたつの類型に区分できる。ひとつはモダン（近代）以前の森林風景である。そこには、のどかで原初的な山村があり、人間はそこに住み

つき、風景と一体化した暮らしがある。それは主客未分離の風景世界であり、構成する諸物はすべてそれぞれ固有の意味を持って存在している。もちろん様々な得体の知れないも風景の中に登場してくる。しかしそれらも、彼らにとっては非常に馴染み深いものであり、あるいは魑魅魍魎と呼ばれ、あるいは神と呼ばれて、これらの総体が有機的にまとまりを持ったひとつの風景をかたち作っている。森林風景のひとつのタイプは、遠い昔にすでに過去のものとなってしまった以上のような原初的な自然風景である。そしてもうひとつはこれとは正反対のモダンな森林風景であり、人間主観によって、外部から知覚され、所有され、制御される「ものの集合」としての森林、言い換えると、知覚対象が知覚主観（人間）から完全に分離した、むしろ森林景観と呼ぶ方がずっと適切な、実体化された風景として捉えられる。それを代表するような針葉樹大面積一斉造林地は、本質的に生産空間であり、近年のアメニティー空間としての森林空間もまたその例外ではない。このような空間もまた、人間をリフレッシュさせ、ふたたび生産行為に向わせることを目的とした生産関連空間に過ぎない。このようなモダンな森林風景が、もうひとつの森林風景として考えられる。

しかしモダン以前の森林風景は遠い昔に過去のものとなり、そしてモダンな森林風景にも陰りが見られ始めてすでに久しい。しかしそうかといって、モダンな森林風景の主役である木材生産などを皆否定して、ただ過去を回顧しているだけでは、いかなる解決にも至らない。そもそも、木材生産活動などモダンな森林風景のすべてを括弧の中に入れてしまうこと自体が不可能でもある。すなわち、過去には戻れず、モダンには確かに陰りが見られるが、それを簡単に乗り越えることも不可能だと考えたときに、以上で展開したような森林風景がこれからの風景として浮び上がる。すなわち、それは、漂泊民的なものも出入りする世界であるから、それは必ずしも「住む空間（様々なものが定着している空間）」ではない。言換えると、それは最早ひとつのエコシステムではないことになる。そしてこのように考えて行くと、以下のような森林風景が浮び上がる。「定着者（従来からの山村定住者、Uターン、定着的生物、現存している生活形態など）に支えられつつも、様々な非定着者（都会人、子供、非定着的生物など。そこに住んでいないもののすべて、すなわち次世代の人間や逝去・消滅したもの、「過去の文化」や「神」など実体がないものなど）も交錯する賑やかで複雑な多交通的な森林風景」、「競争・排除もあるが、本来的には無主的で自由な日本の原初的「にわ」（網野、1990）にも繋がるような原型的な自然風景」、このような風景がこれからの森林風景（自然風景）として浮かび上がる。

このような森林風景は、これまでの林業の担い手であった山村定住民にも支えられた風景であるという意味で、モダンな森林風景の全面的な否定を前提として成立するものでは決してない。むしろ逆に、この風景の中では、例えば依然として木材生産のようなモダンな試みが継続されていくことになる。近代的な思考パターンの第一の担い手であった都市住民が風景の一部を担い続けるであろうという意味でも、それは単なるモダンな風景の否定ではあり得ない。そして、この風景の中では、人間、特に都市住民は、例え、モダンな思考パターンの否定者として再登場する場合であっても、もはやその中に住み着き、溶け込んでいる定住者として登場するのではない。

その場に基本的には無縁な非定着者として登場するに過ぎない。従って、このような風景は単なる過去の風景への回帰でもないことになる。なお今村(1991)は、モダンは簡単に乗り越え得ず、モダンを隅々まで横断することが大切だとして、このような試みをトランスモダンへの試みと呼んでいる。このような考え方に従うと、以上のような森林風景は「トランスモダンな森林風景」と呼べるようになる。そして、以上のような考え方をさらに深めていくと、新たな森林風景は、最早空間というよりも、本来的には、ひとつの開かれた多様体、リゾーム（Deleuze & Guattari、1976）であり、多様なものが生成・消滅し、互いに出会い合い、そして離反しあう、そんな様々な出来事が繰り返される、錯綜する関係の総体として捉えられるようになる。

それは我々とはかかわりなく客観的に存在する「ものの集合体」でもなければ、人間（知覚主観、認識主観）によって捉らえられた単純な対象イメージでもない。そうではなく、それはむしろそんな対象や主観に先立ってあり、事後的にそれらを産み出す「出会いの連続」、「出来事の集合」といった関係の総体となる。それは、近代以前にあったような、人間をその中に完全に包み込んだ牧歌的な風景ではない。そしてまた、それは、逆に、知覚主体としての我々の外部に客観的に存在し、利用され管理されるべく待機している、知覚対象化された近代以降の散文的な風景でもない。そうではなく、それはたぶんそれらに先立って開かれ、そこから我々や客観的な対象像がその度にリクリエイトされ、リフレッシュされていくような、そんな出会いの連続（出来事の集合）として捉えられるようになる。

以上の筆者の考え方の人間の文化的営みも含めた森林景観への読み替えは、これまでに展開してきた生態学上の研究成果の人間社会への単なる外挿ではない。そうではなく、むしろ逆に、ドゥルーズらによって展開された人類のNomad(遊牧民)に関する理論などの森林景観理論への応用であり、両者の共振・共鳴であると考えられる。そして、このような人間社会の理論を持ち込こむことで、これまで見てきたように、森林景観の生態学的構造やその推移パターンも、より包括的に理解できるようになり、人間も含めた自然景観や森林景観の基本構造も、より理解が容易となると考えられる。

**（3）提案してきた理論の問題点とその克服の方途**

以上のように、筆者が提案した樹木の生活戦略に関わる理論（藤本、1993）に従うことで、森林景観（森林風景）の基本構造やその動態の記述、さらには人間も含めた風景の構造や動態についても、その重要な1側面の把握が可能となると考えられる。すなわち、このことは、提案してきた理論が、人間と自然がおりなす「風景」の総体を説明する理論枠組みとしても有効性の高いものであることを示唆している。

しかしながら、これまでに展開してきた理論には、いくつかの大きな問題点があったことも明らかである。すなわち、第1の問題点は、所謂、競争や競合、闘争、戦闘といった「戦い」概念の検討が不充分であったため、新たな風景を開いていく上での「戦う」ことの重要性がそれほど明確に認識されていなかったことである。また、そのため、理論が、非競合・非定着的戦略による「戦い」の図式として、明確に了解されず、このような戦略とそれに対立する競合・定着的な戦略が、ただ並列的・対比的にしか捉えられておらず、これら両者によって、新たな風景が開示されてい

くといった、共生的図式のみが前面に出てしまっていたことが、第２の問題点として抽出される。そして、その結果、新たな風景を開示する戦略として提起されたはずの「非競合・非定着的戦略理論」が、そんな新たな風景の連動的作動を可能にするモデルにはなり切れないでいたらしいということも重要で、これが第３の問題点として浮かび上がる。そして、第４の問題点は、以上の問題点とも密接に関わっているが、提案してきた理論が、ドゥルーズなどの文系の論議と関連させて提示されているとはいえ、現代思想に対する読みが甘く、ドゥルーズなどの論議と共鳴しあうような内容には、必ずしもなっていなかったという問題も無視し難い。

そこで、次章においては、以上のような問題点の克服を目的として、まず、現代思想や現代哲学の動向にもできるかぎり考慮を払いながら、近世・近代以降における「戦い」概念の変容の所在を明確化することなどを通して、「戦い」概念の本来的形態の抽出をはかり、近代を超える風景の連動的開示のためには、風景の開示を「戦うこと・闘争」として了解することが重要となることを再確認しておく。そして、その延長線上に、乗り超えられるべき対象（すなわち敵対するもの）の明確化をはかり、次々章の、筆者が展開してきた理論の、自然と人間の総体に通じる「真の戦いのシェーマ」への組み換えに繋げていくことを目指すことにする。

## Ⅱ．理論の再構成に向けた予備的論考

### （１）「戦う」こととしての風景の開示

すでに触れてきたように、風景は主客に先立って開示されるものであり、その意味で、主観によって恣意的に構成されるものでは決してあり得ない。その意味で、風景の大半は、時代の主導的な共同主観性によって開かれる、安定的で保守的なものとならざるを得ない。風景や景観を開示させるものを、より安定性の高い「風土」のようなものに求める思考パタンが、幾分かの真実性持っているのもそのためである。しかしながら、そのことは何も、風景が常に安定的・固定的なものであることを意味するわけではない。時代とともに変容していくとともに、同時代であっても、共同主観性は一様ではないので、常に別様の風景も開かれる世界でもあると考えられる。

以上のように、風景は、一方で保守的で安定的なものであるが、他方では変容するのが常態の世界でもある。逆に言えば、変容するのが常態ではあっても、変容が急速に進行するには、あまりにも安定性の高いものであるといえる。すなわち、このことから、一つの結論が導き出せるようになる。すなわち、新たな風景が次々と連動的に開かれていくようになるためには、そんな風景の開示を、それに対立する風景との力強い「戦い・闘争」として捉えることが不可欠となるだろうという結論である。認識論や存在論の次元では、風景は常に、主客に先立って、自から開かれるものであり、その意味で、極めて保守的で、非戦闘的なものと了解される。しかしながら、新たな風景の連動的開示を考えるといった実践論の次元で考えると、風景の開示は、必然的に、戦闘的なものとなると考えられる。

現代という時代の風景は、基本的には殺風景の総体に過ぎず、暗く閉塞的な風景が開かれ続けているように思える。我々は、日々、暗い風景に遭遇する。人間同士の姑息な競争、いがみ合い、いじめ、挙句の果ての殺し合い、貧困、競争化社会の中での疲弊や瑣末な争い、落ちこぼれ、様々

な環境問題の噴出、いまだに続く諸戦争など、様々な暗い風景に出会ってしまう。しかし、時代の風景がいつまでもそんな暗くて弱い殺風景の連続であってよいわけがない。そんな殺風景に抗して、明るく力強い風景を切り開いていく「戦い」を戦っていくことが不可欠となる。このように、新たな風景の開示を、「明るく強く戦っていくこと」に帰着させ、そんな「戦い」を戦っていくことによってはじめて、近代の殺風景が乗り超えられるようになるものと考えられる。

**（２）近世・近代以降における「戦い」概念の変容**

上述したように、新たな風景が連動的に開示されていくためは、風景の開示を「戦うこと」として了解することが重要な前提条件となるが、残念ながら、現代という時代においては、このような解釈を無意味化させる、一つの大きな風潮（誤解）が横たわっているように思われる。すなわち、それは、「戦い」概念を狭小・弱小化させ、「戦い」概念がその原初的形態において持つ、明るく力強い側面を看過させ、「戦い」の総体を単なるゲームのような競争に帰着させてしまって当然と考えるような風潮である。

ところで、このような「戦い」概念の曲解は、現代に至る歴史の中で構成されてきたものであるとは疑い得ない。そこで、この節では、以上のような「戦い」概念の矮小化の経緯をたどることを通して、「戦う」営為が本来的に持っていたと考えられる「明るく力強い」側面を抽出し、風景の開示を「戦うこと」として了解することの実践論レベルでの重要性の再確認に繋げておくことにする。

**近世・近代以降の「戦い」論の問題点**

「戦い」概念は、歴史の中で変容し続けてきたものと考えられる。

まず、そんな戦いの論争史について少し振り返っておく。戦いを巡る思索の歴史は長く、様々な思想家によって様々に論議されてきたと推察される。近世・近代以降においても、思想史全般で考えて見ても、ボッブスを始めとし、ルソーの議論、カントもヘーゲルもマルクスも、その他多くの哲学者・思想家が戦いについての思索をめぐらしてきたと考えられる。また一方の自然における戦いについても、近世・近代以降に限定しても、議論は多彩で、進化の問題を中心として、ダーウィニズムやネオダーウィニズムとか、適応戦略理論等々、様々な論議の系譜を辿れる。

論議が多分に拙速であるが、このような論争史の総体を振り返ると、近世・近代以降の「戦い」論には、２つの大きな問題点があったことに気づく。その一つは、近世・近代以降における「戦い」論が、基本的には、近代的思考パタンが徐々に浸透していき、物事を客観的に了解しようとする傾向が顕著となった以降のものであり、その意味で近代という時代の思考パタンからの制約を強く受け、展開されてきたものであっただろうという問題点である。そして、第二の問題点として、第一の点と深く関連しているが、物事の認識はできるだけ客観的になされるべきだとする要請に沿って、時代の進行とともに、自然界における戦いと人間界における戦いが、別個のものとして想定され、究明される傾向が顕著になってしまったという事態が挙げられる。すなわち、戦いの論争に先鞭をつけたボッブスやルソーあたりの議論では、自然における戦いと人間界の戦いがほぼ同じ土俵の上で考えられているものの、時代が進むにつれ、もちろん例外もあるが、これら両者における戦いを分けて考える傾向が顕著となっていったというのが第二の問題点として抽出できる。

**戦いのゲーム化・スポーツ化の進行**

それでは、「戦い」が近代的思考パタンによって了解される傾向が顕著となることによって、また、その結果として、人間界における戦いと自然界における戦いが区別されて論じられるようになった結果、さらに具体的に言って、いったい、どんな問題が生じてきたといえるのか。

まず、戦いが近代的思考パタンによって了解されるということは、それが物心二元論（主観・客観図式）の中で考えられるということを意味している。そして、物心二元論で考えられるということは、戦う主体が実体化され、また、戦う対象（戦う相手や戦う目的など）も実体化されることを意味することになる。そして、そうなると、戦いは、実体化されたモノとモノがモノを巡って戦うことを意味するようになり、そのことは結局、戦いを「競争」に帰着させてしまうことに繋がることになる。

この問題について、少し詳しく見ていくことにする。まず、「競争」が成立するためには、何と何が戦うのかが、前もって定められていなければならないことになる。それから、何を巡って争うのかについても同様である。すなわち、あらかじめ、ＡチームとＢチームが固定化されるかたちで存在し、それがやはりあらかじめある具体的なゴールの獲得を目指して戦うのが競争だということになる(ここでは団体戦の場合を考えているが、個人戦の場合も、まったく同じように考えることができる)。Ａ、Ｂ両チームが実は実体が定かでなく、例えば、Ａチームがいつの間にかＢチームになってしまうようでは、競争は成立しない。敵と見方のゴールがいつのまにか入れ替わってしまう場合も同様で、やはり競争は成立し得ない。もちろん、自然界の戦いも、人間界の戦いも、必ずしも、以上のように、敵味方が純然として区別され、ゴールもあらかじめクリアに設定されているとは限らない。それほど実体化が進んでいない場合の方が多いのかもしれない。しかし、逆にいえば、戦いを、実体化されたモノとモノのモノを巡る戦いに擬すことができれば、戦いを競争と見なすことが可能となる。すなわち、近代的な思考パタン（物心二元論、主観・客観図式、三項図式）は、それを可能にしたのだといえる。そして、物心二元論が、事物が互いに異なったものとして実在しているとする考え方であることは重要で、そのことは結局、ＡとＢとの戦いとＡとＣ、ＢとＣの戦いを、互いに異なったものと考えざるを得なくなることに繋がる。例えば、まず、「戦い」という出来事が生起し、それがたまたま、互いにあまり区別が明瞭ではないもの同士の、ＡとＢであったり、ＣとＤであったりするなら、「戦い」というものの共通性も浮かび上がる。しかし、最初にＡからＤが異なるものとしてあり、それらが戦いあうのだと考えると、当然、それらの戦いは、それぞれ別種の事象だということになるに至る。自然界での戦いと人間界での戦いが、別種の事象と考えられるようになったのも、以上のような主観・客観図式に強く縛られた思考パタンからの当然の帰結と判断できる。

そして、それぞれが別種の戦いだということになると、その後、戦いについて考えられるべきことは、それぞれの戦い方の問題しか残らないということになり、まず、どのように効率的に戦うか（つまり最適戦略）が議論の中心となるに至る。それから、戦いは、完全に放置された状態だと、暗い結果をまねくことになるので、あらかじめ、どんなルールが設けられているのかとか、設けられていないのなら、どんなルールを設ける必要があるのかが問題となってくる。すなわち、戦うことを近代的思考パタンに基づいて考え続けていくと、「戦い」を「競争」に限定し、様々な「競争」の個別化が進むだけでなく、さらには、戦うことのゲーム化・スポーツ化を進行させていくこ

とになる。そして、実際的にも、歴史の進行の中で、このような「戦い」概念の特定化・狭小化・弱小化が進行し、今日に至ったものと推察される。

**明るく力強い営為としての「戦い」概念の再確認**

自然界の戦いも、人間界の戦いも、本来的には、己を固定的なモノの相に留めおかないで、己を乗り越え、己と世界を別様なものに開き変えるような、明るく力強い試みであったと考えられる。言い換えると、本来的には、生物界も人間界も「変わるのが常態」の生成世界なのであり、そんな生成世界の総体に連動して、明るく力強い戦いを切り開いていくことが、戦うことの本来のあり方であったといえる。そしてそんな「明るく力強い戦い」を通して、生物たちは進化し、人間世界も、常に新たな歴史を切り開いてきたのだといえる。そうであるにもかかわらず、以上で見てきたように、歴史の進行に伴う近代的な思考パタンの浸透の中で、人間の戦いの総体は、勝利品の獲得を巡り、同列の他者と争うようなものに矮小化されてしまい、自然界の戦いも同様に、実体としての種や個体、さらには遺伝子が己の適応度を増すための戦い、つまり「生存競争」に限定されるに至ってしまったのだといえる。しかしながら、そんな戦い矮小化は、近代以降のことであるに過ぎない。近代以降の殺風景を乗り超え、明るく力強い風景を切り開いていくためには、風景の開示を、再び、近代以前にあっては、広く認識されていたような、「明るく力強い戦い」の展開として了解し直し、そんな明るい戦いを戦って行く必要があるものと考えられる。

**（3）「敵対するもの」の再確認**

前節では、近世・近代以降に生じた、「戦い」概念の矮小化を振り返り、近代以降の殺風景の総体を乗り超えて、新たな風景を連動・連携的に切り開いていくためには、新たな風景の開示を、明るく力強い戦いの展開として了解する必要があることを指摘したが、このような「明るく力強い戦い」を戦って行くためには、戦うに先立って、「敵対するもの」の何であるかを、できる限り見定めておくことも重要となってくる。そこで、本節では、そんな「敵対するもの」の再確認・再認定を行っておくことにする。

**「敵対するもの」の諸様相**

すでに触れてきたように、新たな風景の開示は、近代以降の殺風景に抗する「戦い」であるといえる。従って、もし、このように考えられるのだとすると、「敵対するもの」は、まずは、「近代以降の殺風景の総体」といった漠然としたものとして捉えられることになる。

すでに触れたように、我々は、様々な暗い風景に遭遇する。瑣末な競争の連続による疲弊、いじめ、無差別殺人、様々な環境問題の噴出。このように、多数で多様な暗い風景が開示され続けているが、それらは、確かに互いに区分可能なものであるし、そんな個々の暗い風景が開かれるに至った理由や背景も、詳細に見ていくと、もちろん、それぞれ異なっていると考えられる。そしてそんな暗い風景の開示に関与する具体的な「もの」もまた、それぞれに異なっているように思われる。いがみ合いがあれば、いがみ合っている人間同士があり、いじめがあれば、特定のいじめるものといじめられるものが抽出されるように思われる。また、環境問題も、例えば、帰化植物の蔓延問題であれば、「敵対するもの」は帰化植物であり、地域の生物多様性の衰退であれば、乱開発を進める特定の事業体であり、資源枯渇問題であれば、資源の無駄使いをしている、何らかの企業とか、消費者全体といったふうに、何らかの実体的なのものが、それぞれの暗い風景の

元凶として特定されるように思われがちである。

しかし、このような解釈は、物心二元論（主観・客観図式）に従った曲解であるに過ぎない。我々は、実体的・実在的なモノが具体的なものであり、非実体的・非実在的なものが抽象的なものだと考えがちだといえる。物事の諸関係についても同様で、通常は、実体的なモノとモノの関係が具体的な関係だと思いがちだ。しかし、実体的なものを具体的なものと見なし、非実体的なものを抽象的なものと見なすというのは、単なる言葉の言い換えに過ぎない。主観・客観図式から見た先入観に過ぎない。つまり、「近代以降の殺風景の総体」といったものは、いっけん捉えどころがないため、抽象的なもののように思えがちだが、それが「敵」の具体的な様相(実相)なのであり、それを実体的なものに還元してしまっては、敵の実相を具体的に捉えたことにはならない。敵は巨大であり、また、極めて手強い総体なのだと考えられる。しかし、敵が巨大で手強いからといって、敵を抽象化して、それを実体的なものに絞っていったとしても、ことは解決しない。敵を小さく弱いものにすりかえていたら、いじめの構図が出来上がるだけで、せいぜい子供同士の喧嘩にしかならない。前節で見てきたように、「戦い」をゲーム化させてしまうだけで、それでは本当の「戦い」は戦えない。従って、「敵対するもの」の認定は、その実体化によってなされるのではなく、そんな巨大で手ごわい総体をトータルに表現し得る概念の抽出（さらなる言い換え）によってなされなければならないことになる。

**真の敵の再確認**

しかし、それでは、「敵対するものの総体」は、どのような概念によって置き換えられ、より鮮明に認定されるようになるのか。

まず、結論から書いておくと、多分、「敵対するものの総体」は、個々の実体的な敵対者の総体なのではなく、このような不逞の輩を生み出し、そんな不逞の輩らも含む人間の総体を、ただひたすら暗い関係に落とし込み、ひたすら暗い風景のみを開示させようとする、近代以降において特に顕著となった、ある種の「対人間・対自然的社会的諸関係の総体」なのだと考えられる。そして、それがどのような種類の社会的諸関係の総体であるかというと、人間と人間の離反、人間と自然の離反を当然のこととして前提するような、社会的諸関係の総体（言い換えると、物心二元論的・物象化的分断構造を前提とする対自然・対人間的社会的諸関係の総体）であると判断できる(注１)。そして、「敵対するものの総体」の中には、そんな諸関係をいつの間にか容認してしまう我々自身の思考パタンもまた含まれているものと推察される。

以上のように、真の敵は、何らかの暗い風景を開きがちな実在的なもの（特定の個人や家族、実在的（物象的）なものとして抽出された人の集まり、現実に実在していると考えられている諸地域社会・諸大学・諸企業・諸国家など、とにかく、モノもしくはモノの集合体のようなものとして実在しているように見えるもの）自体なのではなく、それら問題のある実在的だとされるものの総体を、問題のあるモノの集合体へと至らしめている、以上で触れたような、「近代を特徴付ける社会的諸関係の総体」であると同時に、そのような諸関係の総体を容認してしまいがちな、我々の「思考パタン」にも求められると結論付けられると考えられる。そして、このように考えることによって始めて、現代という時代における殺風景の総体が矛盾なく説明できるようになり、そんな「敵対するもの」との戦い方も明確になってくるものと推察される。

## Ⅲ．理論の再構成の試み

### （１）はじめに

本章では、前章で抽出した「敵対するもの（乗り超えられるべき風景）」との戦い方について論を進め、提案してきた理論の再構築に向かう。「敵対するもの」は、物心二元論に仮託して考えると、巨大で堅固で、乗り超え困難な対峙者といえる。従って、提案してきた理論を、そんな巨大で堅固な「敵対するもの」の乗り超えを目指す理論へと組み替えていくためには、さらなる予備的論考も無駄ではない。そこで、本章ではまず、「敵対するもの」との戦いがどのような様相を示すものとなるかについて、すなわち、「真の戦い」となるため要件について考えておく。そして、以上の論考の延長線上に、最後に、これまでに提案してきた理論を構成し直して、「真の戦い」の基本構造がどのような図式で捉えられるようになるかについて、まとめて行くことになる。

### （２）「真の戦い」の様相

#### 「安直な共生」論を超えて

以上に触れたように、新たな風景の開示は、一種の「闘争・戦い」と考える必要がある。従って、「真の戦い」はまず、「安直な共生」論を超える「戦い」となるものと考えられる。広義の「共生論」は必ずしも間違った理論枠組みとは言えない。言えないばかりか、現代の諸矛盾を解決していくための大枠的論議として、充分、尊重するに値する論理であると見ることもできる。しかし、何の省察もなく、「共生」を持ち出す安易で安直な「共生」論は、「闘争・戦い」の重要性を全く了解しておらず、その意味で乗り超えの対象となる。

もう少し詳しく見ていくと、まず、「安直な共生論」は、何の省察もなく、「戦うこと」を回避し、戦うものたちに対して、「どうして、戦うことばかり考えるのか、そんなことよりも、我々は皆、本来仲間なのだから、『共生』とかさらには『平和』のことを、もっと真剣に考えていくべきではないのか、戦って何かを排除しようなどという考えは暴力的で宜しくない」などといった言葉を返してくる。しかし、このような主張には明らかに大きな矛盾がある。すなわち、このような主張は、まず、平和や共生を訴えていくといった活動も、大枠においては、それに反対するものとの戦いであることを失念している。そして、さらに重要なのは、共生論が一つの運動となるとき、「敵」を認定せざるを得なくなり、これまた安易に「敵」を認定してしまって、結果的に戦ってしまうという矛盾である。「安直な共生論」では、敵の何であるかが、考えるまでもなく前提されている。当たり前のこととして、共生に反対するものやそれらの障害となるものを「敵対者」として認定している。しかし、そんなに単純に「敵」を認定し、固定してしまって良いはずはない。

以上のような、「安直な共生論」は、明らかに、現状の社会が、まがりなりにも共生状態が維持されているか、多少ほころんでいるとしても、修繕可能な状態にあるといった認識を前提にしており、その延長線上で、共生状態を乱そうとする「敵対者」を排除しようとする。これは、無批判的な「平和論者」の論法と全く同じ論法なのだといえる。しかし、そんな現状認識や実践を正しいとする根拠はどこにも存在しない。むしろ、反省がないまま、現状が曲がりなりにも肯定できると考え、無反省なまま認定された「敵対者」を排除しようとする己自身の思考パタンにこそ、何か

暴力的なものがあるかもしれないことを疑ってみる必要がある。「共生」や、そして「平和」は、もちろん我々の希望ではある。しかし、それらは保守・保全することによって達成できるものではなく、戦うことにより、何かを排除し、新たな人間と人間、人間と自然の関係を作り上げていくことによってしか達成できないものなのかもしれない。「共生」や「平和」は、現状の維持・存続や部分修正、過去への復帰によってもたらされる何らかの状態なのではなく、現状を変革する戦いによって、彼方に求められるべき何ものかであるかもしれない。「共生的世界」や「持続可能な世界」、さらには「平和な世界」といった理念自体の中に問題点や矛盾が内在している可能性があり、「暴力現象は、人間の存在に取り消し不可能なかたちで根付いてしまっている」(注２)のかもしれない。そして、「平和な世界」や「共生世界」とされるものも、そんな「暴力的なもの」によって構成・維持されてきたものに過ぎない可能性があり、それゆえ、そんな世界自体を変革していく方向でしか、平和や共生状態の維持・存続はなし得ないかもしれないと考えて見る必要がある。

以上のように、「真の戦い」は、まず、「安直な共生」論を超える戦いなのだと考えることで、その真相が少しは見えてくるようになると考えられる。

**己自身を超えて**

前項では、共生を叫ぶ前に、己の共生論や己自身の中にもあるかもしれない暴力的なものにも目を向けていくことが必要となることを指摘した。もしそうだとすると、真の戦いは己自身との戦い、己を超える戦いでもあることになる。

ニーチェの遺稿集には「私は哲学的人間のあいだに二種類を区別する。一方の者たちはつねにおのれの弁護について、他方の者たちはつねにおのれの敵への攻撃について、思いめぐらす」(注３)という言葉が残されている。この言葉は、軽薄で己や己たちの保身しか考えない哲学者一般に対する強い批判の言葉として受け取る必要がある。敵は外部にあるとは限らないわけだ。己が理想と考える世界像の中や、己自身の中に潜んでいる場合もある。従って、己や己たちの弁護(擁護)を考えたり、敵をあらかじめ無批判なまま定めてしまって、それに対する攻略法を考えたりする前に、己の真の敵が、もしかしたら己や己たちの中にあるのかもしれないことについて、深く考えてみることが必要となる。「人間は乗り超えられるべきあるもの(何ものか)」(注４)であるわけだ。

以上のように、真の戦いは、内なる敵との戦いであり、己を超える戦いでもあると考えられる。

**ゲーム・スポーツモデルを超えて**

以上では、真の戦いが、「共生」を旗印にして敵・味方を明確に区分し、敵をいじめようとするちょっと残虐な「仲良しクラブ」の催しであってならないことや、敵は己自身の中に住み着いているかもしれず、その意味で、たぶん戦いは己自身との戦いでもあるだろうことに触れた。もし以上のように考えられるのだとすると、戦いは、敵対するものが多分に不分明で、己自身さえ敵かもしれない戦いだということになり、ゲーム感覚やスポーツ感覚で戦うことはできなくなるので、「真の戦い」は、必然的に、ゲーム・スポーツモデルを超える戦いでもあることになる。

前章で触れたように、もともとの人間の戦いは、己や己たちの利益の追求を目的としたような「競争」ではなかったと考えられる。この辺りのことを理解するため、よく持ち出される文系的な教養として、ギリシア悲劇のアンティゴネーがあげられる(注５)。アンティゴネーは、これまた文系の教養では欠かせないオイディプス王の娘であり、彼女は、オイディプス王失脚後、戦いに

敗れ、亡骸を埋葬することを許されなかった二人の兄の名誉を守るため、法にそむき兄たちを埋葬したため、罪に問われて死んで行ったとされている。アンティゴネーをどう解釈するかについては、様々な議論が展開されているのだろうが、今日の主観・客観図式を前提とする競争万能論を打破していくためにも、何はともあれ、アンティゴネーが戦ったような明るく力強い戦いには、とにかく感動してしまうことが何よりも大切であるといえる。

ゲーム・スポーツモデルを超える戦いであることの意味するところは、この悲劇のように、それが己の真の欲望のために命を張るような真剣な行為であり、己や己たちの利益のみを求めた戦いではないということになると考えられる。

**文理の壁を超えて**

前章では、時代の進行とともに生じた人間の学と自然の学の分断が、「戦い」の何たるかを見えなくさせ、挙句の果てに、「戦い」の総体を、モノとモノがモノを巡って戦いあう、自己の利益のみを求めたゲーム的競争に収斂させるに至らせた大きな原因となったであろうことを指摘した。従って、そんな状況を打破していこうとする戦いが「真の戦い」なのだとすると、そんな「戦い」は、当然、人間の学と自然の学を分離させない文理の壁を乗り超えて行こうとする戦いとなる。前章で見てきたように、人間界における戦いも、人間以外の生物たちにおける戦いも、それが同じ戦いという概念で示されている以上、本来は同じものなのだと考えられる。そんな人間と自然の総体に共通の戦略を、文理の壁を超えて抽出していく姿勢が不可避となってくるものと考えられる。

**思想史との連動・協働の重要性**

「真の戦い」が文理の壁を超える戦いとなることは、例えば、生態学といった理系的なものであっても、現代に至る思想史や哲学史との連動・協働による「戦い」であるべきことを意味している。近代を超えようとする戦いは、今始まったばかりではなく、実際には、すでに近代の黎明期から戦われてきたのだと考えられる。近世・近代の黎明期にまで遡ると、デカルトに対するライプニッツの戦いがあり、近代以降だと、イギリス経験論に対するカント、カントに対するシェリングやヘーゲルによる戦いも、たぶん、重要な意味を持っているものと考えられる。ヘーゲル批判以降の現代思想に限っても、ニーチェやマルクスの戦いを始めとして、「真の戦い」を戦う様々な系譜があったといえる。すなわち、以上のような思想史・哲学史との連動・連携が、「真の戦い」を戦っていく上で、本来、必須な条件となるものと推察される。

しかしながら、そんな総体の論考は、到底、現時点での筆者の手に負える課題ではない。従って、ここでは、不充分なものに留まらざるを得なくなるが、取りあえずは、筆者がこれまで展開してきた理論の「真の戦いのシェーマ」へのバージョンアップにとって不可欠となると思われた、ドゥルーズと廣松の論議に的を絞って、思想史・哲学史との連携を考えておくこととし、以下の２項において、順次取り上げていくことにする。

**ドゥルーズを巡って**

ドゥルーズのリゾーム、スキゾフレニー論、ノマド論（遊牧民論）は、近代人を縛る構造からの逃走を意図して展開された議論といえる(注６)。ドゥルーズが取り上げる題材の幅は広く、文理を分離しないで「明るい戦い」を論じる姿勢が明確で、例えばその「襞—ライプニッツとバロック」(注７)は、人間文化論であると同時に科学論・数学論であり、生物学論でもあると考えられ、

このような姿勢がドゥルーズの「戦い」の深さに繋がっているものと考えられる。そのノマドロジーも、人間文化論であるだけでなく、例えば生物の世界を説明する図式ともなっていることは明らかである。「真の戦い」を考える場合、ドゥルーズの思想は、人間を無意識に縛る「構造」からの逃走を目指し、明るく力強い戦いを展望し、文理の諸分野の連動・共鳴を画策している点などで、大いに参考になる。大いに参考になるというよりも、「真の敵」との戦いを戦う最大の指針となるというべきかもしれない。そのノマドロジーを抜きにして、「真の敵」との戦いは考えらないし、その縦横に展開される諸議論の総体は、さらに具体的にどのように戦っていくかを考えるための様々な指針を提供してくれているものと推察される。

**廣松哲学を巡って**

現代思想や現代哲学というと、西欧のそれらが問題にされることが殆どだが、わが国における現代思想や哲学に学んで行く姿勢も不可欠となる。そして、その場合、何よりもまず取り上げられるべきは、独自の哲学体系の構築を目指し、かなりのところまでそれを完成させた廣松の哲学であると考えられる。マルクスやドゥルーズと同様、廣松にも文理を分離しない姿勢が明確に認められる。廣松の認識論は、直接的には、明らかにカント以来の近代の認識論哲学に見られた主観・客観図式(物心二元論図式)の乗りこえを目指したものであり、その意味では完全に文系の議論といえる。しかしまた、その一方で、廣松が至りついた四肢構造論や世界の協働主観的存立理論は、マッハやアインシュタイン、ハイゼンベルグなどの物理学理論における自然認識の革新に触発され、また、その批判を通して構成されたものであったことも重要と考えられる(注８)。一方でまた、廣松は唯物史観と生態史観の融合も試みており(注９)、その意味でも、廣松の文理の分離を超える姿勢は明白といえる。

このように、廣松哲学は文理両面に渡る体系をなしていると考えられるが、敢えて、その根幹を抽出してみると、それは、人と人(さらには人と自然)は如何にして共振・共鳴・協働、さらに言い換えれば連帯しあいえるのかの探求、その定式化にあったように考えられる。廣松が、近代の主観・客観図式を批判したのも、この図式では、他者理解が不可能となり、協働不能となるからであり、また、アインシュタインの特殊相対性理論の認識構成を協働主観性の存立を待つものとして了解したのも、そして、唯物史観と生態史観の融合を図ろうとしたのも、このような、共振・共鳴・協働理論の構築を意図した試みであったと考えられる。間違いなく、廣松は本気で、世界は変わるし、変わるべきだし、変えなければならないと考えていたのだと考えられる。そして、そんな考えに従って、変わるべきもの、すなわち、「敵対するもの」の何たるかを特定しようとし、そんな「敵対するもの」との戦いの方途を求めて、共振・協働理論に至る思索の体系を作り上げたのだといえる。そんな廣松の体系が明るく強く戦うための大きな指針にならないわけはなく、このあと提示する「真の戦いのシェーマ」も、大枠ではドゥルーズに従いながらも、主に廣松に導かれ組み立てられるものと予想される。

**（３）真の戦いのシェーマ（試案）**

以上の論考を前提として、多分に拙速ではあるが、真の戦いの図式化へと進むことにする。まだ仮説や試案の提示に過ぎないものにしかなっていないが、一応取りまとめておく。

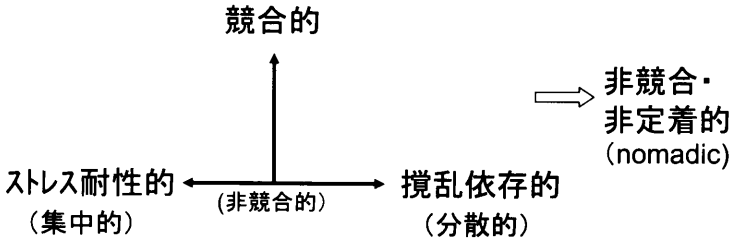
敵との真の戦いの図式となるためには、安易な共生論を超え、己を超え、スポーツモデルを超

え、そして、文理の壁を超えようとするシェーマとなっている必要がある。できれば、文系の哲学や現代思想と理系の成果が融合しあうような図式となっていることも望まれる。そして、その意味で、「真の敵」と思われる「近代の社会的諸関係の総体」やそれを支える「物心二元論図式」や「競争」原理」を超える戦いを示す図式であり、そんな総体が開示させ続ける「殺風景な風景」を乗り超えて、人間と自然の総体が協働・共鳴しあうような風景を指し示す図式でもある必要がある。

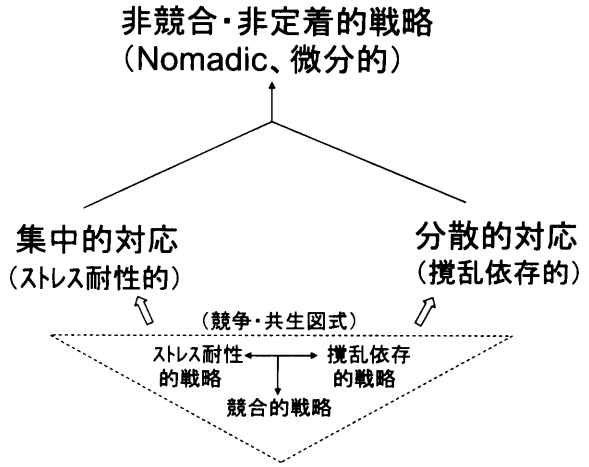
真の戦いのシェーマは、以上のような要件を考慮に入れて組み立てられることになる。

**生物界全体の戦略類型と「真の戦い」のシェーマ**

以上のような要件を考慮に入れて、まず考えてみたのが図－１である。この図式の基本は、筆者のもともとの樹木の戦略類型を示す図式と同形といえるが、ここでは、人間を含む生物界全体の戦いのシェーマを示す図式として提示されている。




図－１　生物界全体の戦略類型




図－２　生物界の「戦い」のシェーマ

導かれた生物界全体の図式の言わんとするポイントだけを抽出しておく。

まず、図－１の左に示した三角形は、生物が支配されがちな競争・共生図式を指し示している。すなわち、生物の生き方は、競合的か否かと、ストレス耐性的(耐忍的)か撹乱耐性的（逃避・逃亡的)かの両軸によって構造化される傾向にあり、これらの対応を鮮明化・徹底化させて行くと、このような競争・共生図式の内部で生き残ることのできる適応戦略(strategy)となる。ストレス耐性的な対応も撹乱依存的な対応も、競合的な対応に比べると競合能力の劣る対応ではあるが、そ

んなそれぞれの対応能力を充分高めていくことさえできれば、競合的な戦略と同様、競争・共生図式の内部に生き残ることができる戦略となると考えられる。

いずれにせよ、これら３つの戦略は、結果的に、この三角形の内部に囲い込まれてしまいがちな戦略であり、競争や共生を原理とする構造の維持・存続を果たす役割を担う定着的な戦略といえる。しかし、生物の生き方はこの３類型に尽きるものではなく、すなわち、図－１の右に示したように、そんな構造から抜け出し、それを超えようとする非競合・非定着的(nomadic)な戦略も考えられる。ここで、非競合は、近代以降の己が利益を目的とした競争は回避するものの、如何なる意味においても戦わないということではない。すなわち、非競合であっても、ゲーム・スポーツ化した競争を超える「戦い」は戦うことになる。競争にも、資源が充分あるときに生じる争奪的競争(スクランブル的競争)と、資源が乏しくなったときにそれを手に入れるために争いあう闘争的競争(コンフリクト的競争)があるが、前者は競合し合わない場合の競争で、後者は競合し合う場合の競争と解釈できる。すなわち、このシェーマで、競争概念ではなく、競合概念で「非競合的戦略」を規定しているのは、コンフリクト的競争、つまり競合的競争は行わないことを表現していることになる。

そして、以上のような非競合・非定着的戦略の「戦い」のシェーマを示したのが図－２で、これが「真の戦い」のシェーマを描いた図式となる。すでに触れたように、ストレス耐性的対応と撹乱依存的対応は、それらをそれぞれ単独で強化させていくことができれば、ストレス耐性戦略や撹乱依存戦略となり、競争・共生図式の中に定着できるが、相互間の競争は熾烈で、いつまで三角形の内部に留まれるかは保障の限りではない。しかし、三角形の内部だけが生きる世界ではないわけで、これら２つの対応をうまく使い分けることができれば、三角形からの逃走（新たな風景の開示）が考えられるようになる。それが非競合・非定着的戦略であり、この戦略は、ドゥルーズに従って、ノマド(遊牧民)的戦略とか、微分的戦略と呼びかえることもできると考えられる。なお、この図式では、競争・共生図式からの逃走を目指す戦いを「真の戦い」と考えているが、そのことは、前節で抽出した「真の敵(物心二元論的・物象化的分断構造を前提とする対自然・対人間的社会的諸関係の総体)」が競争・共生図式として捉え直されていることを意味している。

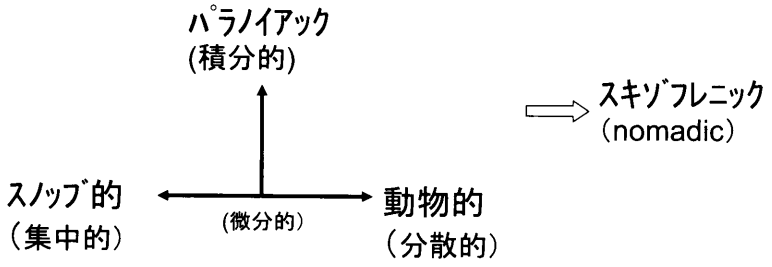
**人間の場合**

図－１、２は生物界全体の図式であり、その意味で、もちろん、人間の場合にも妥当する図式のつもりで描いている。以上の図式は、生態学という理系的研究のみを前提にして組み上げたものではなく、人間における戦略類型や性格類型についての議論も参考にして組み上げた図式であるわけで、もともと、人間も含む生物界全体の「戦い」の図式化を狙った試みであったといえる。従って、どこまで人間界の図式として通用するかどうかは疑問だとしても、人間界の「戦い」を説明する図式となっていなければならないことになる。言い換えると、現代思想などの文系の文脈の中で考えられてきた、人間の生き方や人格などの類型区分も、図－１、２に対応する図式に組み替えられ、関連付けられるものと考えられる。

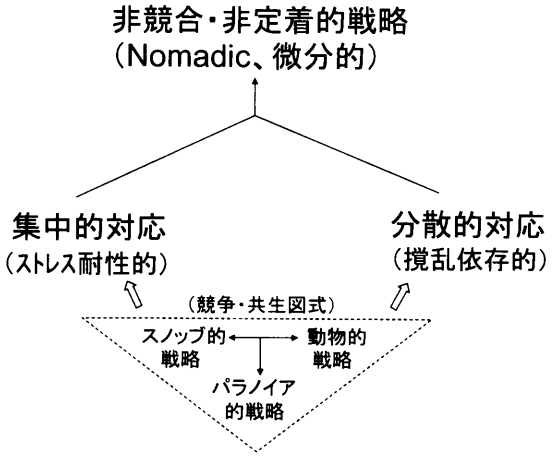
このように考えて、まず、現代思想の中で考えられてきた人間類型を、図－１に即すかたちで組み替えて示したものが図－３である。

すなわち、人間の戦略(人格)類型も、図－１の類型区分と同型の構造で把握可能であり、パラ

ノイアック(積分的)な戦略は競合的なものと、スノッブ的(俗物的・神経症的・集中的)なものはストレス耐性的なもの、動物的(解離的・分散的)なものは攪乱依存的なもの、スキゾフレニックな戦略は非競合・非定着的なものに対応付けられると考えられる。ここで、パラノイアック(偏執病的)とスキゾフレニック(分裂病的)はドゥルーズ・ガタリの用語で(注 10)、浅田による解説(注 11)がよく知られている。また、スノッブ、動物はコジェーブ(注 12)の用語で、東(注 13)や本上(注 14)らが、これらの概念を巡って、「大きな物語の終焉」以降の人間のあり方などについて議論を展開している。そして、人間だけの場合についても、図－2 に対応するスキゾフレニックな戦略の「戦う」シェーマを描くことができ、基本は図－2 とまったく同じで、図－4 となる。




図－3　人間の戦略類型




図－4　戦いのシェーマ(人間の場合)

**4つの図式に対する若干のコメント**

以上の図式について、もう少し説明を加えておく。

まず、パラノイアックなものは、世界や歴史や価値の総体を、その形式と内容の両面において、積分型で捉え切れると考え、結果的にそのように捉え切ろうとし、世界の総体の支配・占拠・変革に向かう性向を持つもので、当然、競合的なものに対応付けられる。それに対して、スノッブ的なものと動物的なものは、そんな複雑な総体を積分型で捉え切ることを、断念もしくは放棄してしまい、世界の総体の支配・占拠へとは向かわない性向を持つもので、その意味で両者とも非

競合的なものとして一括できると考えられる。しかしながら、スノッブ的なものと動物的なものは、非競合的なもの同士ではあっても、その非競合の方向が異なる。すなわち、スノッブ的なものは、世界の総体の積分的理解は目指さないが、世界や価値の総体などについての関心が深い点においてはパラノイアックなものと一致している。その意味で、パラノイアックなものと同様に人間的な欲望を持つものといえるが、そのような人間的欲望に従って、世界や価値の総体を形式的・固定的に了解し、それに従い耐えようとするものであり、その意味で、ストレス耐性的(集中的)なものと親和的なものといえる。それに対して、動物的なものは、人間的な世界了解への関心などは一切示さず、当面の欲求を満足させてくれるモノを求めて、動物のように行き来する性向を持つものであり、その意味で、場当たり的な戦術を示す攪乱依存的(分散的)なものと一致していると考えられ、スノッブ的なものと動物的なものは、非競合の方向性において、その両極を形成しているものと推察される。

以上のように、スノッブ的（ストレス耐性的）なものと動物的（攪乱依存的）なものは、対比的・対立的なものであるが、このことは、必ずしもこの両者の協働・共鳴・融合が不可能であることを意味しているわけではない。コジェーブが指摘しているように、「スノビズムと動物性の間には如何なるかたちでも共存は有り得ない」（注 12）が、共存不可能性は、スノビズムと動物性という、概念化された性向について言えることに過ぎず、スノッブ的なものと動物的なものの間にあるのではない。確かに、スノッブ的なものと動物的なものの陥りがちな方向は正反対のものであると言えるが、そのことは何も、これら両者の共存・協働・共振・融合が不可能であることを意味していない。樹木において、ストレス耐性的なものと攪乱依存的なものが統一可能であることは、すでに、元々の理論において指摘してきた事項であるが（Fujimoto & Miyakawa、1991；藤本、1993)、その人間における対応概念である、スノッブ的なものと動物的なものも、以下で触れる通り、共振・共鳴・融合していく場合もあると考えられる。

すなわち、これら両者がこのような方向を示し始めるのは、彼らを縛る「競合・共生図式」の恣意性・欺瞞に気づき始める時であり、そんな時、両者は共振・共鳴しあうようになり、その延長線上に、そんな図式からの逸脱を目指し、方向転換し、融合しあうようになる。例えば、スノッブ的戦略は、「我慢する」戦略と言い換えられるが、「我慢する」戦略は、三角形の中での生き残り戦略のひとつには繋がるものの、これはかなり忍耐力のいる戦略で、あまり我慢しすぎると神経症に陥るし、結局、心の底ではあまり大事だとは思っていない考えに形式上従うだけの俗物と化すに至る可能性も極めて大きい。そしてそんな我慢が必ず報われる保障はどこにもない。一方の、動物的戦略も同様で、やはり、三角形の中での生き残り戦略のひとつには繋がり得るものの、逃げ回るばかりの神だよりの戦略が、どこまで通用するかには大きな疑問がある。すなわち、この両者が、競合・共生図式の恣意性やそれぞれの戦略の不確実性・無根拠性に気づき始めるとき、両者は、同じ非競合的戦略を取るもの同士として、共振・共鳴しあうようになり、やがては、非競合・非定着的戦略として分裂症的に融合しあうことも考えられる。言い換えると、「我慢」は、ストレス耐性的戦略を取らない限りは意味のない対応なのかというと、そうではなく、「我慢」とは逆の「攪乱依存的」対応とセットで考え、それを、三角形から逃れるためのふたつの戦術(tactics)のひとつとして位置づけると、両者はやがてスキゾフレニックに融合し、非競合・非定着的戦略

となると予想される。

「スノッブ(俗物、えせ紳士、偽貴族)」と「動物」は、通常マイナスイメージで捉えられているが、一方で、スノッブは、聖人ぶらない庶民のようなものに近く、動物は、人間ぶらない、さらに謙虚で優しい生き物なのだと考えることもできる。すなわち、このようなプラスイメージが生きてくるのが、上述したような、彼らを拘束する三角形を超えようとする場合（図－４）で、その場合には、スノッブ的対応も、動物的対応も、プラスイメージで捉え返されるようになる。そして、もし、そうであるならば、もっとニュートラルな用語で言い表すべきだと言うことになる。図－４の三角形を乗り超えようとする場合には、図－２の生物界一般の場合と全く同じ用語を使ってみたが、それはこのような考えからで、三角形からの逃走という「明るく強い戦い」の中では、スノッブ的対応と動物的対応は、他の生物と同様に、集中的対応(ストレス耐性的対応)と分散的対応(撹乱依存的対応)として表現されるようになると判断される。

**これまでに提案してきた理論との一致点と相違点**

最後に、以上に提案した図式と、これまでに提案してきた理論の一致点や相違点について取りまとめておく。

まず、生物、特に樹木の戦略の類型区分として見た場合、提案した図式とこれまでの理論には大きな相違はない。それが、人間界にも当てはまる論議であろうと考えている点でも一致している。従って、本稿で提示した図式が、これまでの理論の批判的継承に相当するものであることは明らかである。しかしながら、両者では、人間界の新たな風景（さらには、新たな人間－自然系の総体風景）が如何に開かれていくものであるかについての考え方において、大きく異なっている。すなわち、前者の理論では、新たな風景の開示が、大枠においては、競合・定着的なものと非競合・非定着的なものの合作（協働）によって開示されてくるであろうといった、共生論的な見方によって捉えられていたのに対して、後者の図式では、その両者が対立的なものとして位置づけられている。そして、また、前者の理論では、非競合・非定着的なものと競合・定着的なものが、互いに異なるものとして、半ば実体化されたかたちで並列的に存在するものとして捉えられているのに対して、後者の図式では、非競合・非定着的なものが、もともとは、競合・定着的なものが構成する構造の内部に展開される、ストレス耐性的(集中的・スノッブ的)なものと攪乱依存的(分散的・動物的)なものの方向転換によって生起するものとして捉え返えされている点でも相違している。言い換えると、以前の理論では、競合・定着的なものとストレス耐性的なもと攪乱依存的なものの３者の関係を、我々を強く拘束する「構造」と見なさず、容易に後２者が融合し、ひとつの非競合・非定着的なものとなり得ると了解しているのに対して、新たに提案した図式では、そんな「構造」を堅固で乗り超え困難な「競争・共生図式≒真の敵」として捉えたのち、これとの「戦い」が考えられていることになる。また、これまでの理論では、ただドゥルーズらの論議に依拠するかたちで、充分な論考が重ねられないまま、樹木における戦略と人間における戦略を統合してしまっていた感が強いが、本稿では、まだ不充分とはいえ、競合的なものが構成する「真の敵」の構造を競合・共生図式として、ある程度まで明確化させ、人間における戦いにおいて占める「スノッブ」的なものと「動物」的なものの位置づけの明確化がはかられている。すなわち、このような点も、本稿で提起した図式のこれまでの理論とは異なる重要な相違点であると考えられる。

また、本稿では、敢えて、「敵」とか、さらには「真の敵」とかいった言葉まで使って、「共生」を内包する「競合・共生図式」に対する「戦いのシェーマ」を提起したが、このことは、もちろん、これまでの、たぶんに共生論的な考え方の総体を無意味化させてしまうことを意図するものではない。すでに指摘しておいたように、広義の「共生論」は、大枠的論議としては、充分尊重するに値する論理であり、そんな大枠の中で考えると、本稿で提示した「戦いの図式」もこのような「共生論」内部での論議として位置づけられる。すなわち、新たな風景の開示が、「戦う」ことによって開示されるものであるとしても、それは、明るくのみ戦われるので、そんな戦いを外部から眺めた場合、近代における「スポーツ化した戦い」と同様に、広義の「共生」を演じる明るい風景の開示として了解されるであろうことからも明らかである。また、本稿で提起した戦いは、「スノッブ」たちや「動物」たちをも同胞と見なしている点からも明らかなように、結果的に他者を排除してしまう、安直な「共生論」よりも、はるかに他者に対する許容度の高い考え方でもある。このことからも、本稿で提示した「戦いのシェーマ」が、広義の意味での「共生論」の範疇を逸脱していないことは明らかで、以上の諸点から考えて、提示した図式は、これまでに展開してきた、たぶんに共生論的な風景開示論をも包括する理論となっていると判断される。

まとめると、本稿で提起した図式は、それがどこまで完成した図式となっているかは別にしても、これまでの理論を批判的に継承し図式であり、これまでの諸論点も、否定し去ることなく充分内部に取り込んだ包括的図式であると考えられる。

**まとめ—共鳴・連動していく「真の戦い」**

以上の論考を通して、我々の「真の戦い」がどのような様相を示すべきものであるのかについてや、結局、それがどの様なシェーマで捉えられるようになるかなどについて考えてきた。

もちろん、「敵対するもの」は手強く巨大である。そのため、現時点で、そんな戦略がどこまで功を奏するかは保障の限りではない。しかし、そんな戦いは、部分的であれば、すでに戦われ始めていたことも確かで、ドゥルーズや廣松の戦いが、そんな戦いの事例であったと考えられる。非定着的な戦略は、もともとドゥルーズのノマドロジーから得た着想で、ドゥルーズの遊牧民的闘争は、すでに何十年も前から進められてきたといえる。また、廣松の戦いも、その物心二元論を超え、競争原理を超えようとした思索の道は完全に「非競合的」であるといえるし、外来の哲学の紹介あたりしかやらないことの多いとされる日本の哲学界の風潮に抗して、粘り強く哲学体系を求め、かつ、哲学と諸科学の隙間をかいくぐって、次々成果を挙げていこうとするやり口は明らかにノマッドのものであったといえる。すなわち、ドゥルーズと同様、廣松哲学も、すでに作動し始めていた「非競合・非定着的戦い」のひとつであったと考えられる。そして、生物の世界全体に目を向けると、すでに多くの生物がそんな非競合・非定着的戦略を実践していることも充分予想される。この理論は、突出型樹形を呈する針葉樹類が非競合・非定着的戦略を示していることを前提とするものであり、少なくとも、針葉樹はそんな戦略を示しているものと推察される。また、我々の様々な実践活動・日々の諸活動の中でも、「真の戦い」が、何処かで、すでに作動し始めているに違いない。従って、人間と自然の総体風景の中で、以上のような「真の戦い」が、新たな風景として共鳴・連動するようになれば、さらに新たな「真の戦い」の作動へと繋がっていくことも充分予想される。

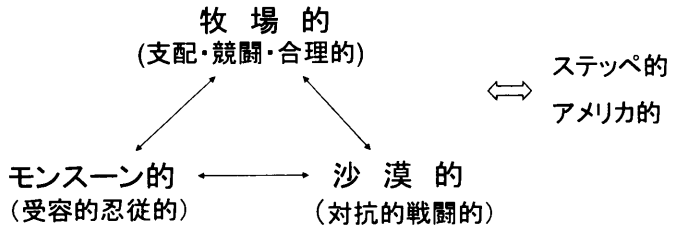
しかしながら、このような共鳴・連動が、「近代の殺風景」を全面的に乗り超える大きな流れを形成するようになるためには、図－４のシェーマの通り、コジェーブ（注 12）によって、「スノッブ」よばわりされたものたち（注 15）や、「観葉植物」と呼ばれ（注 16）、「ヘタレ」(注 17)と呼ばれた「動物」たちの多くが、三角形の海に倦み疲れて、かなたの世界へと思いをはせはじめる必要がある。すなわち、「スノッブ」たちや「動物」たちが、そのストレス耐性(集中)的対応と撹乱依存(分散)的対応を方向転換させ、本当の意味での時代の主役を目指して、連動・融合・連携するかたちで、競合的戦略に敵対するような状況が生じてくる必要があるが、それは、「真の敵」からの逃走であり、結構、現実化困難な事項といえる。従って、そのような状況を生み出していくために、今後も、様々な理論や実践における試行錯誤を粘り強く繰り返していくことが、何よりも重要となると考えられる。

## Ⅳ．まとめにかえて

本稿で取り上げた風景や景観の類似概念として、風土がある。そんな風土は、涌井(注 18)が、景観 10 年、風景 100 年、風土 1000 年と述べているように、風景や景観よりも、はるかに固定性の高いものであると思われる（注 19）。そんな、固定的で動かしがたい風土を巡って、和辻は、その類型区分を２度に渡って試みている。１度目は、その著名な「風土―人間学的考察」（注 20）においてであり、２度目は、その主著「倫理学」（注 21）においてである。ところで、その類型区分の骨格はすでに「風土―人間学的考察」において出来上がったものといえ、それは、よく知られた、風土を、モンスーン的風土、沙漠的風土、そして、牧場的風土の３類型に区分する考え方につきる。確かに、主著「倫理学」では、以上の３類型に、もう２つ、アメリカ的風土とステッペ的風土を付け加えているが（注 22）、以上の３つにくらべ、これら２つについての論及は、必ずしも充分なものとはいえず、また、５つの類型を有機的に関連付けて論じているわけでもない。従って、和辻の風土論は、「風土―人間学的考察」によってその大略が完成したものと見なして差し支えないと思われる。しかしながら、そうかといって「倫理学」における、風土に関する論考が全く「風土―人間学的考察」を超えていないのかというと、そうともいえず、風土が、地理的にも、さらに多様であり得るし、また、歴史的に変化し得るものでもあり得ることを、より強調した論考となっている点などにおいては、「風土」を超えていると考えることもできる。

ところで、以上のような、「倫理学」における論考の優れた点にも留意して、その風土論の総体を図式的に捉えてみると、図－５のような図式が描けるようになるが、これと図－１や図－３を見比べてみると、驚くほど似ていることに気づく。これは最近、「風土－人間学的考察」を読み返してみて気づいたことであるが、たぶん、これら両者の類似は単なる偶然のものとは考えられない。互いに共振しあう何かを持っているように思えてくる。「ストレス耐性的」と「受容的・忍従的」は極めて類似しており、スノッブ的と受容的・忍従的は、明らかに共鳴しあう表現といえる。ギリシアのオリンピアードに通じる「競闘」概念は、本稿で提示した「競合」と互いに引き合っているし、支配と定着もまた通じ合う言葉として了解できる。これらに比べると、対抗的・戦闘的と撹乱依存的は、一見繋がりを欠く概念同士のようにも思える。しかしながら、「動物的」を介して、

攪乱依存的戦略（分散的対応）の何であるかを考え直してみると、それが、与えられた過酷な環境の総体を忌み嫌い、あたかもそんな総体が存在しないかのように見なすものの、結果的に、機会的に訪れる偶然(幸運・一時的猶予)に己を委ねざるをえなくなるといった、多分にネガティブな戦略として了解できるようになる点において、砂漠的風土における「対抗的戦闘的」対応と通低するもののように思えてくる。




図－５　和辻による風土の類型区分の模式図化

確かに、前者は風土の類型区分であるのに対して、後者は、生物界全般や人間の戦略に関する類型区分であり、論考の対象が異なっている。それにも関わらず、両者が共鳴・共振しあうのは、第１には、本稿で提示した図式が、風土ではないが、風土と関係の深い風景の開示に関わる図式でもあるためであることは間違いない。論考の対象領域が大きく重なっておれば、論考内容が似てきても、何の不思議もないことになる。しかし、もちろん、論考対象が重なっているからといって、論考内容が必ず似てくるとは限らない。従って、類似している理由は、さらに、考え方や論考のスタンスの類似にも求められることになる。すなわち、和辻の場合も、主観・客観図式を超えて思考していこうとする思考パタンを取っており、また、図－５の、競闘、戦闘、対抗などの概念にも現れているように、風土の開示（人間の自己了解の仕方）を「戦い」概念で捉えようとしていることでも一致している。結局、以上のような思考パタンや論考のスタンスの取り方などにおける類似が、両者の類型区分の類似に繋がっているものと推察され、もしそうであるならば、和辻を読み解くことの意味は極めて大きなものとなると考えられる。

このように考えて、和辻を読み解くと、その読みの深さ、幅広さに感心させられる。まず、和辻の風土論は、しばしば「環境決定論」と誤解されているが（注 23）、少し読みさえすれば、「環境決定論」には相当しないことが容易に読み取れる。その思考パタンの基本が「環境決定論」でないことは、「風土－人間学的考察」の冒頭近くに示された、「ここでは自然環境がいかに人間生活を規定するかということが問題なのではない。通例自然環境と考えられているものは、人間の風土性を具体的基盤として、そこから対象的に開放され来たったものである」（注 24）といった、自然環境を人間の風土性からの二次的構成産物と見なす解釈からも明らかで、それは、主観・客観図式を超えようとするもので、環境決定論でないばかりか、相互作用論でもないことがわかる。また、「風土の類型は同時に歴史の類型である」（注 25）といった叙述からもわかるように、和辻にあっては、人間存在の構造が、「風土」の側からだけでなく、「歴史」の側からも説明されるべきものと考えられている。すなわち、このことは、和辻の論考が「風土」が歴史的に変容することを前提とするものであることを意味しており、この点から見ても環境決定論とはいえない。

そして、そんな思考パタンは、後論の風土の３類型論を展開する段になっても、少しも変質しておらず、充分明晰である。確かに、後論においては、何度も、「風土的限定」とか、「風土の限定」といった言葉を使って、風土が人間文化を全面的に規定してしまうかのように記述しているが、それは、物理的・客観的な環境条件からの限定を語っているのではなく、いったん「人間の自己了解の仕方」として捉えられたものからの再規定を語っているだけに過ぎず、環境決定論への退行を意味するわけではない。すなわち、和辻の思考の展開方向の基本は、「我々は風土的限定を超えて己を育てて行くこともできるであろう」（注 26）とか、「しかも我々は牧場的性格を獲得することはできるのである」（注 27）といった叙述からも明らかなように、一貫して、人間の自己了解の仕方を規定しがちな構造からの脱出に向けられたものであったと判断できる。また、主著「倫理学」における「アメリカ的風土」と「ステッペ的風土」の追加は、一義的には、「風土―その人間学的考察」における３類型には収まりきれない別種の風土の追加といえるが、和辻は、これらを、地理的気候的相違（空間的相違）との関連でのみ構成されたものではなく、歴史的に構成されたものでもあると考えている。この点に着目すると、「倫理学」における、これら二つの風土の追加は、旧来の風土を超える「新たな風土」の可能性を示唆するものでもあることになり、このような論考も、固定的構造からの脱出を考える和辻の基本姿勢の現れと解釈できる。すなわち、和辻の論議の総体が、結果的にどれほど近代の超克を可能にするものであったかについては疑問が残るとしても（注 28）、近代を超えようとする思索（物心二元論を超えようとする思索）のひとつであったことだけは確かと思われる。また、和辻の論考には、各所に、傾聴すべき見解が散りばめられている。例えば、和辻によれば、牧場的風土を特徴付ける「競闘」概念は、古代ギリシアにおけるの「競闘の精神」に由来し、また、「競闘の精神」は、ニーチェも説いたとする「争闘を是認する精神」（注 29）として了解される。すなわち、このような考え方に従うならば、「競闘」概念は、結構、明るく力強い「戦い」概念と見なせるようになり、このことは、本稿で取り上げた「競合すること」の持つ意味の再吟味を迫るものともいえる。このように、「風景」を問題にしていくうえでも、和辻から学び得るものは少なくないと考えられる。

本稿では、以前から提案してきた「非競合・非定着的戦略理論」の問題点を抽出し、その、近代を超える風景の連動的作動を可能にする「戦いのシェーマ」への組み換えを試みたが、提示された図式はまだ、試案的段階に留まるものであるに過ぎない。今後に残された課題は山積しており、以上で取り上げた、和辻とのより詳細な突合せも、そんな残された課題のひとつとなると考えられる。「非競合・非定着的戦略」が現実に作動するか否かは、生態学的には、それが有効な生き残り戦略として機能しえるかどうかにかかっており、この問題を数理生態学的手法などを使って実証して行くことが不可欠となるが、現在のところは、まだ、予備的解析の状態に留まっている（藤本、2009）。すなわち、理系的側面に関しては、このような数理生態学的解析のさらなる深化が、今後に残された最も大きな課題となる。一方、文系的側面については、廣松、ドゥルーズなどを参照しながら、主観・客観図式を超える環境倫理学、すなわち「風景倫理学」を確立していくことが、今後の最も重要な検討課題となる（注 30）。本稿も、それに向けた論考であったといえるが、まだ、試案的段階以前に留まっており、総体として、今後の課題となると判断できる。そして、以上のような文系的側面と理系的側面は融合される必要があり、このような考え方に従うと、主

観・客観図式を超える生態学、すなわち、「風景の生態学」の確立が必要となる。すなわち、このような課題も、本稿において部分的には論じているものの、「風景倫理学」と同様に、今後に残された大きな課題のひとつとして位置付けておく必要があると考えられる（注 31）。

## 注

注 1：物心二元論批判や物象化については廣松渉「哲学入門一歩前」(講談社現代新書)、同「新哲学入門」(岩波新書)、「物象化論の構図」(講談社学術文庫)などを参照。物心二元論批判については、近代以降、現代に至るまで、様々な試みがなされてきたと言えるが、洋の東西を問わず、物象化をキーワードとし、三項図式批判に始まり、協働理論などの実践論にいたる廣松の試みが最も本格的なものではないかと考えられる。

注 2：今村仁司「暴力のオントロギー」勁草書房、223 頁。

注 3：ニーチェ「生成の無垢・上(原佑・吉沢伝三郎訳)」ちくま学芸文庫、389 頁。

注 4：ニーチェ「ツァラトゥストラ(手塚富雄訳)」(世界の名著４６・ニーチェ(手塚富雄編)中央公論社所収)、64 頁。

注 5：ソポクレース「アンティゴネー(呉茂一訳)」岩波文庫。

注 6：ドゥルーズ・ガタリ「千のプラトー(宇野邦一他訳)」河出書房新社。河出文庫にも入っている。

注 7：ドゥルーズ「襞－ライプニッツとバロック(宇野邦一訳)」河出書房新社。

注 8：廣松渉「相対性理論の哲学」勁草書房や、同「科学の危機と認識論」紀伊国屋書店。

注 9：廣松渉「生態史観と唯物史観」ユニテ。ちくま学術文庫にも入っている。

注 10：ドゥルーズ・ガタリ「アンチオイディプス（市倉宏祐訳）」河出書房新社。河出文庫にも入っている。

注 11：浅田彰「構造と力」勁草書房、同「逃走論」勁草書房。

注 12：コジェーブ「歴史の完了についての二つのノート(丹生谷貴志訳)」(『G. S・たのしい知識』vol.4、1986、ユー・ピー・ユー)。

注 13：東浩紀「動物化するポストモダン」講談社現代新書。

注 14：本上まもる「“ポストモダン”とは何だったのか」PHP 新書。

注 15：東浩紀は「オタク」論を展開し(注 13)、80 年代までのオタクの特質をスノビズムによって把握し、彼らを江戸時代以来の日本の伝統的文化の後継者のひとつとして位置づけている。このような考え方に従うと、「オタク」たちもまた、本稿でいう、いずれ反転して、非競合・非定着的な戦略の展開を担うようになるであろう「スノッブ」たちの主要なメンバーとして位置づけられることになる。なお、90 年代以降のオタクは動物化していると考えているが、その場合も、「動物」たちの主要メンバーとして、やがて、非競合・非定着的戦略を担うようになるものと考えられる。

注 16：丹生谷貴志「歴史の完了と戦争」(『G. S・たのしい知識』vol.4、1986、ユー・ピー・ユー)、339 頁。なお、丹生谷のこの論稿は、「戦う」ことの意味を考えて行く上で、重要な論点を提供しており、特に、殺し合いを必要条件とする「平和のための戦争」ではなく、殺さないことを絶対条件とする「戦争のための戦争」論は、明快でユニークな論議といえる。

注 17：本上(注 14)による「動物化」批判は手厳しく、動物たちにおいては、「『解離』を利用することによって、他者の単独性と真摯に向き合わず、ひたすら人間的葛藤の回避と過剰なまでのナルシズム的自己防衛がなされている」(注 14 の 195 頁)と批判し、彼らを「いわゆる『ヘタレ』と呼んでもよいだろう」(同、196 頁)と指摘している。確かに、そんな「動物たち」を無批判に擁護する動物肯定論者たちは、何らの「真の戦い」も戦っているとは言えず、その言説を、「動物さえも取り込んだ高度情報化大衆消費資本主義を利するのみ

で、それを出し抜く有効な戦略を欠いている」(同196頁)ものとする批判には頷ける。動物肯定論者たちは、「動物たち」をさらにヘタらせる役割しか果たし得ていないものと判断できる。しかしながら、そんな批判の総体を同時に「動物たち」に向けるのは、いささか酷でもある。また、そうすれば、「動物たち」が持つ潜在性の芽を摘んでしまうことに繋がる可能性が高く、そうなれば、それこそ、「真の敵」に対抗する戦略にとってマイナスとなる。すなわち、「動物たち」も、「スノッブたち」と同様、「非競合・非定着的戦略」にとって有効な戦術を潜在的に持った同朋として位置づけておく必要がある。もし、同時代を生きる我々の殆どすべてが、結局、動物化しているか、せいぜい「スノッブ」に過ぎないのだとすると、なおさらである。「動物たち」や「スノッブたち」を否定すれば、戦略の担い手が皆無となりかねないことになる。

注18：涌井雅之「景観から見た日本の心」NHK出版。

注19：風土が、固定性の高いものであることは、また、それが、空間的に考えても、特定の地域を超えた広い地理的空間に共通して見られる特性であることを意味している。廣松に従って、そんな風土の何であるかについて考え直してみると、風土とは、共同主観性（廣松渉「存在と意味(第一巻)」岩波書店、175頁、359頁など）によって同型化されがちな風景や景観の開出傾向を概念化したものあり、その意味で、通用的真理性（廣松渉「新哲学入門」岩波新書、105～108頁）を持った「対自然対社会的諸関係の総体」の概念化・物象化の産物ということになる。本稿では、風景について論考してきたが、その論考を深めていくためには、風土との比較も重要な視点となると考えられる。

注20：和辻哲郎「風土―人間学的考察」岩波書店。岩波文庫にも入っている。

注21：和辻哲郎「倫理学(一、二、三、四)」岩波文庫。

注22：注21の(三)の333～335頁、356～366頁。

注23：例えば、亀山純生「環境倫理と風土」大月書店、128～131頁。

注24：注20の1頁。

注25：注20の23頁。

注26：注20の119頁。

注27：注20の120頁。

注28：和辻に問題があったとすると、それは、亀山が言うような、物心二元論(主観・客観図式)を超えることを徹底化させ過ぎたこと(注23の130頁)にあるのではなく、逆に、それを超えることにおいて不徹底であったことにあると考えられる。つまり、和辻は、風土・風景的実体験を、現象学的方法に依拠して、結果的に、頭の中に宿る知覚内容(認識内容)に還元してしまっており、それでは、主観・客観図式を超えたことにはならない。すなわち、本文で触れたように、和辻の思考の基本は、構造からの脱出に向けられたものであったといえるが、以上のように、風土を認識内容として、頭の中に固定化させてしまうため、固定的風土からの脱出という実践的契機が希薄となり、そのことが、結局、和辻の思索の限界(結果的に主観・客観図式を超える論考、すなわち、近代を超える論考とはならなかったこと)に繋がったものと推察される。和辻は、風土を、人間主観に先立ってある客観的事象の集合体とは見なさず、「人間の自己了解の仕方」(注20の8～14頁)という感性的(人間的)な活動として了解した。しかしながら、そんな人間的活動は、本来、頭の中にもたらされる知覚内容(認識内容)である以前に、客観ばかりか主観にも先立って開かれる「風土(風景)の開示」という事態(実践的・対象的活動)であったはずである。にもかかわらず、和辻はそのようには了解せず、それを、結果的に知覚内容(認識内容)に帰着させてしまう。「問題なのは、結局、彼が感性を「眼」で、つまり哲学者の「眼鏡」を通して考察するという仕方でしか、扱えないということ」(マルクス/エン

ゲルス「ドイツ・イデオロギー(廣松渉編訳小林昌人補訳)」岩波文庫、45 頁)にあり、そのため、「人間的活動それ自身を対象的活動として捉えることをしない」(同、230〜231 頁)という認識及び実践論上の誤謬を犯してしまったのだと判断できる。なお、以上のことは、今後、注 30 で示したような、環境倫理学の風景倫理学化を進めていくに際し、和辻(特にその倫理学)を参照していく場合には、極めて重要な留意点となることを意味している。まずは、以上のような和辻の限界を、廣松などを参照して、より明確化しておくことが必要となると思われる。

注 29:注 20 の 86 頁。

注 30:主客に先立って開かれるフェノメナルな知覚風景的現相(廣松「哲学入門一歩前」、注 1)、すなわち「風景」から出発することが、主観・客観図式を超える基本であり、その意味で、倫理学であれ何であれ、主観・客観図式(物心二元論)を超える学の対象領域は「風景」となる。従って、主観・客観図式を超える環境倫理学を考える場合も、必然的に、その対象領域が「風景」となり、学の総体が「風景倫理学」と呼ばれるべきことになる。環境問題の噴出という事態もまた、「物心二元論的・物象化的分断構造を前提とする対自然・対人間的社会的諸関係の総体」の開示という「暗い風景」の開示に帰着するものといえ、物心二元論や、その延長線上に考えられる「競争原理」や「市場原理」を乗り超えようとする「戦い」によって、始めてその解決の糸口が見出されるようになると考えられる。すなわち、本稿で提示した「戦いの図式」も、もちろん、そんな環境問題の解決を意図した図式でもあると言えるが、もし、そうであるならば、このような物心二元論を超える実践活動を支えるにたる環境倫理学が必要となり、結局、そんな環境倫理学が「風景倫理学」となるものと考えられる。

注 31:注 30 で示した「風景倫理学」の場合と同様に、主観・客観図式を超える生態学は、必然的に「風景の生態学」、「風景生態学」となる。理系である生態学の中では、通常、この領域は「景観生態学」などと呼ばれ、風景概念は学の対象領域とはされず、従って「風景生態学」は認知されていない。一方、文系や社会一般においては、風景概念は広く認知されているが、生態学という言葉自体の使用頻度が少なく、代わって、「エコロジー」概念がもてはやされている。そのため、結局、理系と同様に「風景生態学」概念は極めて例外的にしか使われていない(例えば、現代思想・特集　風景生態学(1992 年 9 号、青土社))。すなわち、「風景」の問題は、このように、文理の分断、主観・客観図式の浸透の中で、唯一の学が構成されることなく漂っているが、例えば、「生態学」と「エコロジー」は異なるといった解釈は単なる詭弁に過ぎない。文理一体の風景の学の発展のためにも、物心二元論を超えた「風景の生態学」が必要となると考えられる。

## 引用文献

網野善彦(1990):日本論の視座. 小学館.

ドゥルーズ(1973):ノマド的思考(立川健二訳、1984). 現代思想、1984 年 9 月臨時増刊号、163-175、青土社.

Deleuze, G. & F. Guattari(1976) : Rhizome. Minuit. [豊崎光一訳・編「リゾーム」(1977). エピステーメー,臨時増刊号,朝日出版社].

Deleuze, G. & F. Guattari(1980) : Mille Plateaux. Minuit. [ A Thousand Plateaus, trans. by B. Massumi(1987), Athlone Press. 千のプラトー(宇野邦一ほか訳、1994). 河出書房新社].

Forman, R. T. T. & Godron, M.(1986) : Landscape Ecology. Wiley & Sons.

藤本征司(1993) : 北海道の高木類の生育・更新様式に関する比較形態・生態学的研究. 静大演報、17、1 -64.

藤本征司(1998) : 高木類の生育更新・樹形特性から見た森林景観の基本構造の把握. 平成7～9年度科学研究費補助金(基盤研究 C)研究成果報告書.

藤本征司(2009) : 里山域の森林景観の生態学的基本構造とその整備に関する研究（Ⅲ）—「原始の森」の復元について—. 静大演報、33、1-16.

Fujimoto,S. & M. Miyakawa(1991) : Growth characteristics of *Betula ermanii* in particular reference to response patterns at timber lines. J. Agr. Hokkaido Univ., 65, 219-228.

藤本征司・若木　哲(1999) : 引佐演習林の森林景観の生態学的基本構造—全域での林分動態の概略とマツ人工林分の推移—. 静大演報、23、57-67.

Grime, J. P.(1977) : Evidence for the existence of three primary strategies in plants and its relevance to ecological and evolutional theory. Amer.Natur., 111, 1169-1194.

Grime, J. P.(1979) : Plant Strategies and Vegetation Processes. Wiley.

今村仁司(1986) : 現代思想の系譜学. 筑摩書房.

Pianka, E. R.(1974) : Evolutional Ecology, 2nd ed. Harper.

リオタール(1975) : 漂流の思想（今村仁司ほか訳、1987）. 国文社.

四手井綱英(1976) : 森の生態学. 講談社.

杉村　乾(1993) : ランドスケープエコロジーの見方・考え方. 林業技術、617、34-36.